

セメント樽の中  
の手紙

葉山嘉樹



松戸与三はセメントあけをやっていた。外の部分は大きく目立たなかったけれど、頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽おおわれていた。彼は鼻の穴に指を突っ込んで、鉄筋コンクリートのように、鼻毛をしゃちこばらせている、コンクリートを除とりたかつたのだが一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、間に合わせるためには、とても指を鼻の穴に持つて行く間はなかつた。

彼は鼻の穴を気にしながら遂々とうとう十一時間、——その間に昼飯と三時休みと二度だけ休みがあつたんだが、昼の時は腹の空すいてるために、も一つはミキサーを掃除していて暇がなかつたため、遂々とうとう鼻にまで手が届かなかつた——の間、鼻を掃除しなかつた。彼の鼻は石膏細工せつこうの鼻のように硬化したようだった。

彼が仕舞しまい時分に、ヘトヘトになつた手で移した、セメントの

樽たるから小さな木の箱が出た。

「何だろう？」と彼はちよつと不審に思ったが、そんなものに構つて居られなかつた。彼はシャヴルで、セメントますにセメントを量はかり込んだ。そして柵ますから舟へセメントを空けると又すぐその樽を空けにかかつた。

「だが待てよ。セメント樽から箱が出るつて法はねえぞ」

彼は小箱を拾つて、腹かけの井どんぶりの中へ投ほうり込んだ。箱は軽かつた。

「軽い処を見ると、金も入つていねえようだな」

彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の柵を量らねばならなかつた。

ミキサ―はやがて空廻からまわりを始めた。コンクリがすんで終業時間になつた。

彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、ひと先ず顔や手を洗った。そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の長屋へ帰って行つた。発電所は八分通り出来上つていた。夕暗に聳える恵那山は真つ白に雪を被つていた。汗ばんだ体は、急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足下では木曾川の水が白く泡を嚙んで、吠えていた。

「チエツ！ やり切れねえなあ、嬬は又腹を膨らかしやがったし、……」彼はウヨウヨしている子供のことや、又此寒さを目がけて産れる子供のことや、滅茶苦茶に産む嬬の事を考えると、全くがっかりしてしまった。

「一円九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われ、九十銭で着たり、住んだり、篋棒奴！ どうして飲めるん

だい！」

が、フト彼は井の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてるセメントを、ズボンの尻でこすった。

箱には何にも書いてなかった。そのくせ、頑丈がんじょうに釘づけしてあつた。

「思わせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがつて」

彼は石の上へ箱を打ぶつ付けた。が、壊ぶわれなかつたので、此の世の中でも踏みつぶす気になつて、自棄やけに踏みつけた。

彼が拾つた小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。それにはこう書いてあつた。

——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破碎器クラツシャへ石を入れることを仕事にしています。そし

て十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラッシャーの中へ嵌はまりました。

仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺れるように、石の下へ私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合つて、赤い細い石になつて、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉砕筒ふんさいとうへ入つて行きました。そこで鋼鉄の弾丸と一緒になつて、細く細く、はげしい音に呪のろいの声を叫びながら、砕かれました。そうして焼かれて、立派にセメントとなりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになつてしまいました。残つたものはこの仕事着のボロ許ばかりです。私は恋人を入れる袋を縫つています。

私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手

紙を書いて此樽の中へ、そうと仕舞い込みました。

あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀相かわいそうだと思つて、お返事下さい。

此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。

私の恋人は幾樽のセメントになつたでしょうか、そしてどんなに方々へ使われるのでしょうか。あなたは左官屋さんですか、それとも建築屋さんですか。

私は私の恋人が、劇場の廊下になつたり、大きな邸宅へいの塀へいになつたりするのを見るに忍びません。ですからそれをどうして私に止めることができましょう！ あなたが、若し労働者だったら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

いいえ、ようございます、どんな処にでも使つて下さい。私



の恋人は、どんな処に埋められても、その処々によつてきつと  
いい事をします。構いせんわ、あの人は気象きしょうの確しつかりした人  
ですから、きつとそれ相当な働きをしますわ。

あの人は優やさしい、いい人でしたわ。そして確たかりした男おとこらし  
い人でしたわ。未まだ若わうございました。二十六になつた許ばかりで  
した。あの人はどんなに私を可愛こひがつて呉くれたか知しりませんで  
した。それなのに、私はあの人に経帷布きようかたびらを着きせる代しろりに、セメン  
ト袋ふくろを着きせているのですわ！ あの人は棺かんに入いらないで回かいてん転が窯が  
の中へ入いつてしままいましたわ。

私はどうして、あの人を送おくつて行きましよう。あの人は西へ  
も東へも、遠とほくにも近ちかくにも葬ほうむられていいるのですもの。

あなたが、若もし労働者ろうどうしやだつたら、私にお返事かへし下さいね。その  
代り、私の恋人の着きていた仕事着しごとぎの裂きれを、あなたに上げます。

この手紙を包んであるのがそうなのですよ。この裂には石の粉と、あの人の汗とが浸<sup>し</sup>み込んでいますよ。あの人が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょう。

お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委<sup>くわ</sup>しい所書と、どんな場所へ使ったかと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかつたら、是非々々お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

松戸与三は、湧<sup>わ</sup>きかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた。

彼は手紙の終りにある住所と名前を見ながら、茶碗に注いであつた酒をぐつと一息に呻<sup>あお</sup>つた。

「へべれけに酔つ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊<sup>ぶ</sup>して

見てえなあ」と怒鳴った。

「へべれけになつて暴れられて堪たまるもんですか、子供たちをど  
うします」

細君がそう云った。

彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

(大正十五年一月)

セメント樽の中の手紙

底本：「全集・現代文学の発見・第一巻 最初の衝撃」学芸書林  
1968（昭和 43）年 9 月 10 日第 1 刷発行

入力：山根鋭二

校正：かとうかおり

1998 年 10 月 3 日公開

2006 年 2 月 1 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。